

試験地における57年の のマツタケ発生状況

1. 57年の気象とマツタケの発生

3年連続して不順の気象に見舞われ、特に57年は高冷地の稲作に冷害が発生するなど、農作物に被害を与えた。

豊凶が気象に大きく左右されるマツタケにとって、57年はどんな気象であったろうか。そこで本誌No46号（1982. 3）に掲載した、気象からみたマツタケの豊凶判定表に、当年の気象をあてはめてみたところ表-1のようになった。

表-1 気象によるマツタケの豊凶判定

マツタケ豊作の条件項目	試験地(測候所)			豊丘(飯田)			四賀(松本)			丸子(軽井沢)		
	年度			55	56	57	55	56	57	55	56	57
1. 梅雨時の雨量は多い方がよい。	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○
2. 7～8月中旬は晴天が多く、気温が高いこと。	×	×	×	×	×	×	D	D	×	×	×	D
3. 9～10月中旬の間は地温が大きく上下しないこと。	×	×	D	×	×	×	×	×	×	×	×	○
4. 地温が一旦19℃に低下したらその後20℃以上に再上昇しないこと。	×	○	○	×	○	○	×	○	×	○	○	○
5. 地温が19℃に低下した日の前後15日間くらいは、降雨日数が多いこと。	×	×	○	×	○	○	×	○	×	D	○	○
6. 地温が19～15℃の間の日数が長いこと。	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

○ D ×……気象月報の平年数値及び試験地観測資料にもとめて比較判定。
○……豊作条件に適合
凡例 ×……豊作条件に不適合
D……豊作条件に一部分適合

四賀試験地は、7～8月の菌根繁殖期の積算地温が3試験地中で最も高く、56年を上回っており、発生直前まで良い気象条件で推移したが、9月中旬及び10月中旬に大きな地温の低下があった。このことから、四賀地区は当初における豊作の期待を裏切られるような結果に終わったであろうことが推測される。

丸子試験地は、8月下旬以降は56年より良好な気象条件に恵まれたが、7～8月の積算地温は56年を下回った。このことから、丸子周辺の生産量もあまり伸びなかったものと思われる。

2. 試験地のマツタケ発生状況

気象条件に恵まれず、発生量の増加があまり期待できない年であったにも係らず、県下5か所の試験地のうち、マツタケの発生している4か所の試験地の施業区においては、表-2のとおりシロ数及び発生本数何れも増加した。

シロについてみると、塩尻5、豊丘4、四賀1と3試験地で10箇所増加したが、大巾に増えた塩

不順な気象の年であったことに変わりはないが、広はん地域にわたる本県の場合、地域によってかなり異なった推移があることが、観測の結果から判明した。つぎに、地域別に3箇所の試験地についてその特徴をあげてみると、豊丘試験地は前年より良い気象条件であったが、地温が19℃～15℃に低下する期間（マツタケの原基形成期間）が他の試験地より極端に短く、従って、マツタケの発生期間も短かった。このことから推測して、下伊那地区のマツタケ発生量は、発生初期は好調で今年こそはと期待されていたが、結果は思ったより少なかったというところではないだろうか。

表-2 マツタケ試験地のシロ数・発生数の推移

試験地	年度	マツタケ収穫量	
		本数	前年比%
塩	55	13	73本
	56	13	104
	57	18	141
丸	55	5	41
	56	6	128
	57	6	226
豊	55	8	61
	56	9	224
	57	13	327
丘	55	6	154
	56	6	148
	57	7	267
四	55	-	-
	56	4	25
	57	5	29
賀	55	26	175
	56	32	481
	57	42	723
計	55	6	154
	56	6	148
	57	7	267

注 辰野試験地は未発生

尻は施業後4年目、豊丘は3年目に当たる。また、施業当時発生位置が点状や棒状であったものが、3年経過した現在では、半円または円形のシロとしての形を確認することができるようになった。

発生本数は、前年比で塩尻136%、丸子177%、豊丘146%、四賀116%と増加した。なお、丸子、豊丘の発生量は、1ha当たり換算すると50kgを越える発生量である。

こうした施業区の発生経過からみて、環境改善施業はマツタケ増産に不可欠の条件であることがうかがえる。農閑期を利用して、施業推進をぜひ計りたいものである。

(経営部篠原)